

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 43年ぶりに返却されたノート (74吋望遠鏡取説)

東京天文台岡山天体物理観測所は1960年に開設された。当時世界7番目の大きさであったイギリスのグラブ・パーソンズ製の74吋望遠鏡(写真1)と国産初の本格的望遠鏡であった36吋望遠鏡(写真2)が設置された。



写真1 74吋望遠鏡



写真2 36吋望遠鏡

74吋望遠鏡はイギリスから輸入されたため、取扱説明書は英語であった。当時、岡山観測所に現地で採用された技術スタッフは全員地元の高校を出たばかりのものであった。そこで、現地責任者であった技術主任の石田五郎氏は、その若者に英語、ドイツ語、数学の授業をおこなった。

74吋望遠鏡の取扱説明書はゼミ形式で勉強を行い、ドイツ語は石田さんの講義、数学はゼミ形式で勉強した。岡山観測所の1期生(野口、乗本)、2期生(渡辺、中桐)はこの授業を受けたので大学の教養課程以上の語学、数学の力をつけたのである。

筆者の後、3期生(岡田)、4期生(瀬尾)が入ってきた。その一人に、後に宇宙研に移った瀬尾君というのがいた。若者は常に将来に大きな夢と希望を持って職場を選ぶ。これらの皆は日本一の天文台で働けると喜び勇んで入ったに違いない。何時の時代でも天文学、宇宙というのは何かしら大きな夢を描けるのである。筆者は岡山観測所には5年間在籍した。筆者はもっと勉強がしたいという願いを汲んでくれた大沢所長から東京転勤、夜学への推薦入学の労を取ってもらえた。勇んで大きな夢を抱いて岡山観測所に入ってきた瀬尾君には、天文台での仕事は夢を満たしてくれなかったようである。筆者が東京に出て何年もしないうちに、やはり大沢所長がロケット開発をやりたいという瀬尾君を宇宙研に配置換えする労をとった。

筆者は、東京に出るとき、岡山観測所でノートの左ページに取扱説明書の英語を書き写し、右ページのその日本語訳を書いたもの 4 冊を瀬尾君に譲ったのであった。そして 40 数年の年月を経た昨日、瀬尾君から分厚封書が届いたのである。開いてみると 4 冊の古いノート（写真 3）と手紙が入っていた。瀬尾君は宇宙研を定年退職した後、招聘職員（宇宙研では再雇用職員をこのように呼ぶらしい）として宇宙研に残っていた任期が終り宇宙研を卒業したとあり、40 年以上もっていた筆者のノートを返却してきたのである。



写真 3 40 数年ぶりに返却されたノート 4 冊

今の人たちには信じられないだろうが、当時は現在の複写機という便利な機械はなかった。「青焼き」という 1 ページもののコピーをとる器械はあったが、綴じたもののコピーは取れなかった。先日、図書室の古い資料のなかに萩原雄祐（戦後日本の天文学に指針を与えた元東京天文台長）というとてつもなく偉い人の直筆の論文コピーがあることを知り驚いたが、当時は文献を自分の手で一字一句書き写していたのである。この書き写すという作業だけでもその内容は相当頭に入る。今時のようにコピーを取って終わりの時代とは雲泥の差があった。

瀬尾君が返してきたノートもまさしく、そのような作業で英語の取扱説明書を書き写し、辞書を片手に懸命に訳したものであった。そのあるページの例を写真 4、写真 5 に示す。

写真 4 は、74 吋赤道儀望遠鏡の極軸の北極の軸受け部分の図である。また写真 5 は、赤道儀のサイデリアル駆動の機構図である。このような複雑な図を書き写した時代が筆者にもあったことに感激を覚えている。

このような作業による学習と、現代の計算機による検索で容易に資料が入手できることと比較する事に何の意味もないが歴史の一齣として資料に加えることにしよう。

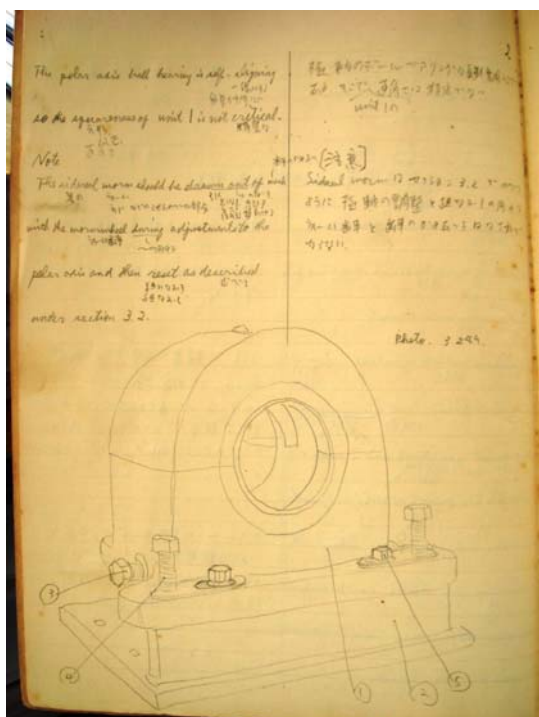


写真4 極軸軸受け部分の図



写真5 サイデリアル駆動機構